

## 育児中の養育者の子どもへの働きかけの内容と育児意識 —自身の母親からの伝承の有無との関連から—

Consciousness and Contents of the Approaches to Children of  
Care-Takers under Child-Rearing  
: Focusing on the Handing it Down Orally From Generation to Generation

長田 瑞恵  
Mizue NAGATA  
横井 紘子  
Hiroko YOKOI

西脇 二葉  
Futaba NISHIWAKI  
藪崎 伸一郎  
Shin-ichiro YABUZAKI

渡邊 孝枝  
Takae WATANABE  
鈴木 晴子  
Haruko SUZUKI

### 要旨

本研究は、育児中の養育者が乳幼児に対して行うあやし行動について、3つの目的に焦点を当てて検討を行った。その結果、以下の3点が明らかとなった。(1) 育児中の養育者は既存の歌を育児に取り入れている者が多く、それ以外にも、育児語やオリジナルなフレーズなど、様々な視聴覚的コミュニケーションの手段を取り入れている養育者が多かった(2) 現在養育中の回答者の母親から受けた視聴覚的コミュニケーションによる働きかけの内容や量は、養育者の自分の子どもへの視聴覚的コミュニケーションの内容や量と類似していた。(3) 現在の視聴覚的コミュニケーションを多く使用する養育者は、相対的に育児不安が強く、子育てに自信がないことが示された。第3の点については、視聴覚的コミュニケーションが育児不安を引き起こしているのではなく、育児不安が強いがゆえに「もっとできることはないか」という動機づけにつながり視聴覚的コミュニケーションを取り入れる工夫につながっていると解釈された。以上の結果を踏まえ、今後の課題について考察した。

The purpose of this study is to focus on the three factors of audio-visual communication that children's care-takers under child-rearing. As a result, the following three points became clear. Firstly, many of the children's care-takers have adopted an existing song in their child care, and there were a number of other caregivers who were adopting various audio-visual communication methods, including childcare and original phrases. In the second, the child-rearing care-takers' content and the amount of the approaches of the audio-visual communication received from their mothers are linked to those of their own experiences. Thirdly, the care-takers who used a lot of audio-visual communications are shown that their childcare anxieties are relatively strong, and there is no confidence in their child-rearing. In the third point, we need more considerations of seeking for the correct reasons. For example, that high anxiety is caused from struggling to make their own child-rearing methods better.

## 1 問題と目的

近年、虐待の増加が顕著であり、平成27年度には児童相談所の対応件数が10万件を超えている（厚生労働省，2016）。中でも、0歳から就学前までの子どもが被害者となっているものが4万5千件ほどあり、乳幼児期の虐待事例の多さが目立つ。また、日本では加害者が実の父母であることが多いのが特徴であり、主な虐待者別構成割合をみると「実母」が50.8%と最も多く、次いで「実父」が36.3%となっている（厚生労働省，2016）。その背景の一つとして、育児中の父母が直面する様々な過酷な現状が挙げられる。中でも、養育期の家族が直面する問題の一つとして育児不安が挙げられることも多い。育児不安との関連要因として、育児に対する充実感欠如、育児に対する満足感欠如、生活上の疲労感、子どもに対する否定的感情、育児による拘束感の5つを指摘しているものなど（神庭・藤生・飯田、2005）、多数の研究が存在する。それ以外にも神庭他（2005）は育児不安と家族機能充足度との関係や、生活上の疲労感との関連なども指摘している。

育児不安やそれに関連する要因に関する研究は1980年代から始まり、既に40年近い研究が積み重ねられている（吉田，2012）。しかし、吉田（2012）の指摘するように、育児不安の研究領域では、例えば育児不安の定義が研究者間で一致していないなど、まだいくつかの課題が残されている。

前述のように、虐待が増加の一途をたどり、その大きな要因として養育者の育児不安が挙げられるのであれば、その定義や内容の詳細を検討することももちろん重要である。しかしながら、それ以上に、育児不安の軽減に効果のある現実的方法を模索することは喫緊の課題であろう。そのためには、育児中の養育者がどのような行動をとり、自分の子どもとどのようなコミュニケーションをとっているのかを明らかにする必要がある。なぜなら、育児不安の内容や質にはかなりの個人差があるとの指摘もあるからである（e.g., 興石，2002）。したがって、養育者が子どもに対して、どのような行動をとり、どのようなコミュニケーションが成立すれば、育児不安の軽減、解消につながるのかを明らかにすることが重要であると考えられるからである。

そこで、本研究では、まず、乳幼児育児中の養育者が育児行動の中で自分の子どもにどのように働きかけているのかについて、あやし行動に焦点を当てて実態を明らかにすることを第一の目的とする。あやし行動には、言葉かけや声掛けなどを中心とした視聴覚的なコミュニケーションと、スキンシップやふれあい遊びなどを中心とした身体接触的なコミュニケーション、それらを組み合わせたものなど様々なものが考えられる。本研究ではそれらの中でも、主に歌や声掛け、言葉かけなど視聴覚的なコミュニケーションを中心としたあやし行動に焦点を当てる。その理由としては、視聴覚的なコミュニケーションも身体接触的なコミュニケーションも乳児期においても幼児期においても大切なコミュニケーション手段ではあるが、子どもが幼いうちには、身体接触的コミュニケーションを行っている際には養育者の側が子どもへの身体接触を始めることでコミュニケーションが始まることが多いのではないだろうか。特に、乳児期の首が座る前の新生児期から養育者と子どもとの間では、身体接触的コミュニケーションは主に養育者から子への方向性をもって成立する場合が多いと考えられるが、たとえ身体がまだ自由に動かせない新生児期においても人の言語音に対する感性については良く知られている事象であろう。

本研究では、養育者と子の間で交わされるコミュニケーションの中でも、特に言葉かけや声掛けなどを中心とした視聴覚的なコミュニケーションに焦点を当てる。育児不安に関する先行研究では、首が座る前の3か月以前の乳児を育児中の養育者の育児ストレスの強さが指摘されており、産後一か月前後の母親に対する家庭訪問が育児支援に効果があることも示されている（e.g., 都筑・金川，2002）。そこで、

誕生直後から、より活発な身体接触的コミュニケーションが可能になる前でも十分に成立し得る養育者と子どもとのコミュニケーション手段、特に視聴覚的なコミュニケーションに焦点を当てることによって、育児の最初期からの検討が可能になると考えた。

なお、本論文では歌や言葉かけや声掛けなどを「視聴覚的コミュニケーション」として総合的に考えることとする。なぜなら、中川・松村（2006）が指摘するように、養育者が乳児に直面する時、養育者は話し方や声だけでなく、顔、体や手、指の動き、諸行動のタイミングとリズムなどが様々に変化するからである。歌や言葉かけや声掛けなどは音声を媒介とした聴覚的な要素が不可欠であるという意味では聴覚的コミュニケーションの側面が大切であるが、同時に養育者と子どもとのアイコンタクト、養育者の体や手、指の動き、聴覚的な働きかけと視覚的な働きかけのタイミングなど、視覚的な要素も含まれると考えられる。そのため、本論文では、歌や声掛け、言葉かけなどを「視聴覚的コミュニケーション」として総合的に考えるものとする。

本研究の第2の目的は、乳幼児育児中の養育者自身が、自分の母親からどのような働きかけを受けて育ってきたかを記憶しているかどうか、乳幼児育児中の養育者の育児行動や育児意識に影響を与えているか否かを明らかにすることである。虐待の世代間連鎖についてはその存在や強さについて議論が続いているが（e.g., 會田・大河原, 2014; 久保田, 2010）、自らが受けた養育をモデルとして、乳幼児育児中の養育者が育児に対する意識や育児行動を変化させている可能性を考えることも必要であろう。なお、自身の乳幼児期についての記憶はいわゆる「乳幼児健忘」という現象として知られているように、成長後は想起することが非常に難しいとされる。本研究でも実際には自身の母親から様々な働きかけを受けていたにもかかわらず、それを想起出来ないために回答できない対象者がいる可能性は否定できない。しかし、例えば働きかけ全てを想起出来なくても、何らかの働きかけやコミュニケーションをとっていた記憶は断片的に報告される可能性が考えられる。そこで、本研究では、養育者自身が乳幼児期に自分の母親とやり取りしたコミュニケーションの実態を克明に明らかにすることを目的とするのではなく、ごく断片的にでも母親から受けた働きかけについて言及されたものについて検討を行うことを目的とする。

本研究の第3の目的は、乳幼児育児中の視聴覚的なコミュニケーションの内容や量と、育児に対する意識とは関連するか否かを検討することである。乳幼児育児中に我が子と十分なコミュニケーションが取れていると感じている養育者は、育児に対して肯定的であり、育児不安が低いと予想される。反対に、子どもとのコミュニケーションが取れていない養育者は、育児に不安を持ち、育児に対して否定的な意識や態度を持ちやすいのではないだろうか。子どもに対するコントロール不可能感が育児ストレスの一つの要因となることを示した先行研究がある（村上・飯野・塚原・辻野, 2005）。したがって、子どもに対するコントロール不可能感を軽減させるためにも、子どもとの円滑なコミュニケーションは不可欠であると考えられる。

なお、乳児期と幼児期では子どもの発達状態や言語能力、運動能力などが著しく異なり、一括りに「乳幼児期」として養育者に対してコミュニケーションの実態や育児意識を問うことは雑駁すぎるかもしれない。しかし、まず、子どもの年齢を細かく分けて、「〇何歳児の子どもに対してはどうか」というような詳細な検討を行う前に、本研究では、一般の人々を対象として「乳幼児」として幼い子ども全般に対するコミュニケーションの方法や育児意識について探索的に問うこととする。その上で明らかになったことを踏まえ、例えば「乳児」「幼児」もしくは「〇歳児」というような細分化した年齢ごとの子どもの養育についての検討を積み上げていくための探索的研究として行う。

以上の問題意識を踏まえ、本研究では以下の仮説を検討する。

第1に、乳幼児育児中の養育者は、自分の子どもとのコミュニケーションをとるために、歌、わらべ唄、育児語などの視聴覚的コミュニケーションを積極的に使用するだろう。

なお、本研究におけるわらべ唄とは、阿部（2002）による区分を参照し、呼びかけの際に発せられる親子間における音声一般をわらべ唄とみなした。また、育児語とは、乳幼児に対して話しかける際に大人に向かって話す場合とは異なる形で使用される単語を指すものと定義した。

第2に、自分の母親から受けた視聴覚的コミュニケーションによる働きかけの内容や量は、乳幼児育児中の養育者の自分の子どもへの視聴覚的コミュニケーションの内容や量と類似しているだろう。

第3に、乳幼児育児中の視聴覚的コミュニケーションの内容や量と、育児に対する意識とは関連するだろう。具体的には、乳幼児育児中の視覚的コミュニケーションの内容・量が充実している養育者は育児満足度が高く、育児不安は低いであろう。

以上の仮説を検討するために、本研究では、乳児から未成年の子どもを育児中の養育者を対象に、乳幼児を養育中に自らの育児行動における視聴覚的コミュニケーションについての質問群、自分の母親から受けた視聴覚的コミュニケーションについての質問群、乳幼児育児に対する意識についての質問群の3つの質問群から成り立つ質問紙を配布し、結果を分析する。

## 2 方法

### (1) 協力者

筆者の知人を通じて研究協力に同意した成人20名であった。現在乳児から高校生までの子どもを主たる養育者として育児中の保護者（回答者：男性2名、女性17名、不明1名）であった。回答者に父親を含めたのは、この2名の質問紙の「主たる養育者欄」に父親も挙げられていたため、母親と区別する必要がないと判断したためである。また、既に乳幼児期の育児を終えて子どもが学齢期以降になっている養育者の場合、第1子が乳幼児の頃を振り返って思い出して書いてもらうよう依頼した。なお、協力者の中にはすでに子どもが高校生にまで達しているために、第1子が乳幼児だったのが10年ほど前になっていて、一部回顧的なデータにならざるを得ないものも含まれていたが、できる限り思い出しながら質問紙に回答するように依頼した。同様に養育者自身の乳幼児期についても、「乳幼児健忘」の問題があるため、思い出せる範囲で断片的でも構わないから回答するよう依頼した。

### (2) 調査期間

平成29年1月中旬であった。

### (3) 材料

質問紙法を使用した。調査目的を簡単に記したフェースシートに続いて、現在の家族構成と、回答者が乳幼児時代の家族構成についての質問に回答を求めた。続いて、回答者が子どもの頃に回答者の母親が歌った歌や使用していた育児語（大人に対しては別の言葉があるのに、子どもに向けて違う表現をしている言葉：例 犬→ワンワン）、オリジナルフレーズの有無を「一般には知られている歌ではないが、自分の母親が作ったと思われる歌やフレーズ」という形で尋ねた後、同様の質問を乳幼児を現在養もしくは過去に養育している回答者についても乳幼児養育中に関して質問した。最後に、吉田・山中・巷野・太田・山口・牛島（2014）が作成した育児不安尺度のうち、4、5か月児用の質問紙を用い、協力者に5段階評定を求めた。吉田他（2014）の育児不安尺度4、5か月児用は6つの因子（「育児不安」

Table 1 質問項目一覧 (1/2)

質問群	質問番号	質問内容	回答形式
自分が子どもの頃 (乳幼児期)		1.から6.までの質問は、ご自分が子どもの頃(乳幼児期)についてお答えください。覚えている範囲で結構ですので、具体的にできるだけ多くお答えください。	
	C-1	ご自分が幼いころ(0~5歳)に、ご自分のお母様がご自分とよく一緒に歌っていた歌の題名もしくはフレーズ	自由記述
	C-2	ご自分が幼いころ(0~5歳)に、ご自分のお母様がご自分と時々一緒に歌っていた歌の題名もしくはフレーズ	自由記述
	C-3	ご自分が幼いころ(0~5歳)に、よくご自分のきょうだいや友達がご自分と一緒に歌っていた歌の題名もしくはフレーズ	自由記述
	C-4	そのほか、ご自分が幼いころ(0~5歳)から知っている歌の題名もしくはフレーズ	自由記述
	C-5	ご自分が幼いころ(0~5歳)、一般に知られている歌ではないが、ご自分のお母様が自分で作ったと思われる歌やフレーズがありましたか? 当てはまるほうに○を付けてください。	「あった」・「なかった」の2択
	C-5-2	質問5.で「あった」とお答えくださった方にお伺いします。その歌・フレーズは替え歌のようなものでしたか? それともご自分のお母様のオリジナルのものでしたか? 当てはまるものに○を付けてください。	「替え歌」・「オリジナル」・「はっきりしない」の3択
	C-6	ご自分が幼いころ(0~5歳)、お母様が使っていた育児語(大人に対しては別の言葉があるのに、子どもに向けて違う表現をしている言葉:例 犬→ワンワン)がありましたら、お書きください。	自由記述
		7.から12.までの質問は、第1子のお子様(0~5歳の頃)についてお答えください。覚えている範囲で結構ですので、具体的にできるだけ多くお答えください。	
	現在の育児行動	D-7	ご自分が子育て中に、ご自分がお子様とよく一緒に歌った(歌っている)ことがある歌の題名もしくはフレーズ
D-8		ご自分が子育て中に、ご自分がお子様と時々一緒に歌った(歌っている)ことがある歌の題名もしくはフレーズ	自由記述
D-9		その他、ご自分が子育てをするようになってから、ご自分がお子様とは一緒に歌わないが知っている歌の題名もしくはフレーズ	自由記述
D-10		ご自分が子育て中に、ご自分は歌わなかったが、お子様がよくきょうだいや友達と一緒に歌った(歌っている)歌の題名もしくはフレーズ	自由記述
D-11		自分が子育て中に、一般に知られている歌ではないが、ご自分で作った歌やフレーズがありましたか? 当てはまるほうに○を付けてください。	「あった」・「なかった」の2択
D-11-2		質問11.で「あった」とお答えくださった方にお伺いします。その歌・フレーズは替え歌のようなものでしたか? それともご自分のオリジナルのものでしたか? 当てはまるものに○を付けてください。	「替え歌」・「オリジナル」・「はっきりしない」の3択
D-12		ご自分が子育て中に使っていた育児語(大人に対しては別の言葉があるのに、子どもに向けて違う表現をしている言葉:例 犬→ワンワン)がありましたら、お書きください。	自由記述

11項目、「夫のサポート」6項目、「育児満足」5項目、「子どもの育てやすさ」4項目、「自信のなさ」5項目、相談相手の有無)3項目)から成り立っていたが、本研究では、これらをランダムな順序に並べ替えたものを提示し、評定を求めた。Table 1に回答者が子どもの頃に関する質問と、乳幼児を現在もしくは過去に育児している回答者に関する質問を掲載する。

Table 1 質問項目一覧 (2/2)

質問群	質問番号	質問内容	回答形式
(提示はランダム・*印は逆転項目)	因子1: 育児不安 11項目		
	1	子育ては自分には合っていないので早く好きなことがしたい。	「全くあてはまらない」から「とてもよくあてはまる」までの5段階評定
	2	毎日生活していて心に張りが感じられない。	
	3	疲れやストレスがたまっていてイライラする。	
	4	ゆったりとした気分で子どもと過ごせない気がする。	
	5	子どもを育てていて自分だけが苦労していると思う。	
	6	何か心が満たされず空虚である。	
	7	子育てを離れて一人になりたい気持ちになることがある。	
	8	一人で子どもを育てている感じがして気持ちが落ち込む。	
	9	体の疲れがとれずいつも疲れている感じがする。	
	10	だれも自分の子育ての大変さをわかってくれないと思う。	
	11	育児や家事など何もしたくない気持ちになることがある。	
	因子2: 夫のサポート 6項目		
	12	夫は家事に協力的である。	
	13	夫と自分の二人で子どもを育てている感じがする。	
	14	夫といろいろなことを話す時間がある。	
	15	夫は子どもの相手をよくしてくれる。	
	16	夫は自分のことを理解してくれていると思う。	
	17	家庭内の重要な決定をするのに夫がいてくれたと思う。	
	因子3: 育児満足 5項目		
	18	子どもを育てるのが楽しい。	
	19	母親として子どもに接している自分も好きに思える。	
	20	子育ては自分にとってやりがいのあることだと思う。	
	21	子どもをもつ母親としてしみじみとした幸せを感じる。	
	22	子どもを宝物のように大切に思える。	
	因子4: 子どもの育てやすさ 4項目		
	23	育てやすい子どもであると思う。	
	24	寝たり起きたりのリズムが安定している子どもであると思う。	
	25	機嫌のよいことが多い子どもだと思う。	
	26	子どもの発育発達はおおむね順調である。	
	因子5: 自信のなさ 5項目		
	27	自分はうまく子どもを育てていないと思うことがある。 * 自分がほかのだれよりも自分の子どものことをわかっていると思う。	
	28	* 子どもは私と一緒にいるのを楽しんでいると思う。	
	29	* 子どもを育てていてどうしたらいいかわからなくなることがある。	
30	自分は子どものことをわかっていないのではないかと思うことがある。		
31	自分は子どものことをわかっていないのではないかと思うことがある。		
因子6: 相談相手の有無 3項目			
32	子育てのことで相談できる人がいてよかったと思う。		
33	何でも打ち明けて相談できる人がいてよかったと思う。 * 子どものことでだれに相談したらいいかわからなくて困ることがある。		
34			

#### (4) 手続き

著者の知人を通して、乳幼児を現在もしくは近い過去に育児している養育者を中心に質問紙を配布し、持ち帰ってもらった。そして必要事項を記入後、著者が直接回収した。

複数の子どもがいる場合には第1子が乳幼児の頃について回答を求めた。

#### (5) 得点化

回答者が乳幼児時代にその母親が歌っていた歌や使っていた育児語の有無、回答者が乳幼児育児中に歌っている歌の有無や使っている育児語の使用の有無で回答者を分類した。育児不安尺度については吉田他に基づいて6つの下位項目に分け、各平均評定値を算出した。

#### (6) 倫理的配慮

本研究は対象者が人であるため、事前に本学研究倫理審査委員会に研究計画及び質問紙概要を提出し、倫理的配慮に問題がないとの承認を得ている。

### 3 結果と考察

仮説の検証を中心に結果を述べていく。なお、本研究では分析対象者が20名と少数であったため、結果の正規分布を仮定したパラメトリック検定ではなく、ノンパラメトリック検定を中心に行った。また、本研究での統計的検定はIBM SPSS Statistics 21を使用した。

まず、第1の仮説を検証するため、乳幼児を現在もしくは近い過去に育児している養育者が子どもと一緒によく又は時々歌っているか否かについて、人数を算出した。その結果をFig.1に示す。棒グラフ中の数字はそのカテゴリーに分類された回答者の人数である。

Fig.1から明らかなように、乳幼児を現在もしくは近い過去に育児している養育者は育児中に曲数や頻度には個人差があるもの子どもと歌っている（歌っていた）者が6割以上を占めていた。育児行動の中で「歌」が果たす役割の大きさを示唆する結果であると考えられる。

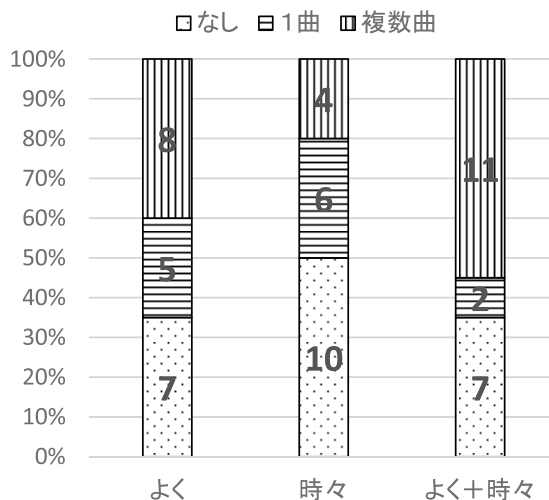


Fig.1 乳幼児育児中に子どもと歌ったか否かと曲数

また、乳幼児を現在もしくは近い過去に育児している養育者が既存の歌ではなく自身のオリジナルな曲やフレーズを使っているか、また育児語を使用しているかについて、それぞれ人数を算出した。オリジナルフレーズを使用していたと回答した者にはその内容の記載を具体的に求めたが、はっきりしないという回答や、替え歌、回答者自身が自作ということのみの回答に留まり、実際にどのようなものであったのか具体的に記載されたものはなかった。集計した結果をFig.2に示す。棒グラフ中の数字はそのカテゴリーに分類された回答者の人数である。自身のオリジナル曲を使用した人数はやや少ないものの、育児語を使用している（していた）人数は6割を占めた。

さらに、歌、オリジナルフレーズ、育児語の3つの視聴覚的コミュニケーションの使用に関連があるかを検討するために、「子どもとよく又は時々歌うか」×「オリジナルフレーズを使うか」、「子どもとよく又は時々歌うか」×「育児語を使用するか」、「オリジナルフレーズを使うか」×「育児語を使用するか」の3つについてクロス集計を行い、人数を算出した。その結果をFig. 3に示す。

この3つの組み合わせについてそれぞれの使用の有無に関連があるか否かを検討するために、それぞれFisherの直接確率法による検定を行い人数の偏りがあるか否かを分析した。その結果、「子どもとよく又は時々歌うか」×「育児語を使用するか」のクロス集計のみ人数の偏りが有意傾向であり ( $p = .052$ )、子どもとよく又は時々歌う回答者に育児語を使用する者が期待値より多く、子どもとよく又は時々歌わない回答者に育児語を使用しない者が期待値より有意に多い傾向があった。それ以外の視聴覚的コミュニケーションの組み合わせの間には有意な関連は見られなかった。この結果には、もともと自身のオリジナルな曲やフレーズを使っている人数が少なかったことが影響を与えている可能性がある。しかし、比較的、育児中に取り入れられることが多い歌と育児語に関しては、両者の使用の有無に関連がある可能性が示され、子どもと共に歌うことがある養育者は育児語を使用しやすいことが示唆された。言い換えれば、視聴覚的コミュニケーションのうち、一般的に使用されやすい歌を育児に取り入れている養育者は育児語も取り入れやすいことが示唆された。

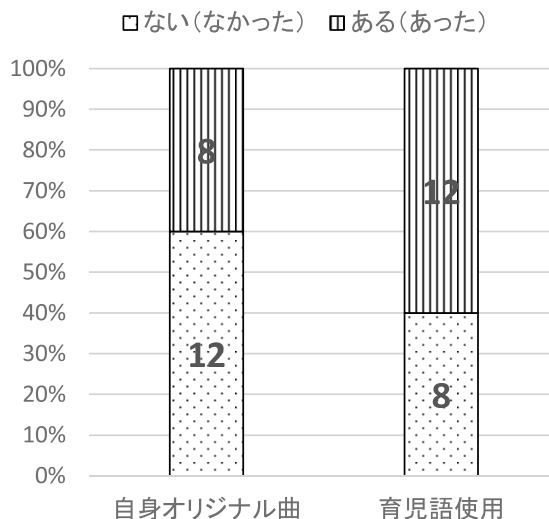


Fig.2 乳幼児育児中に自作のオリジナル曲や育児語を使用したか



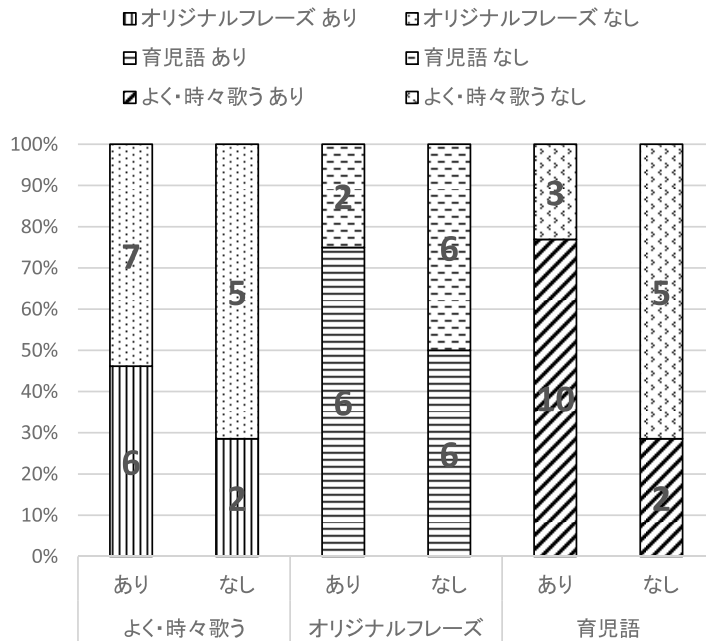


Fig.3 歌、オリジナルフレーズ、育児語の3つの視聴覚的コミュニケーションの使用のクロス集計

以上の結果から、仮説1「乳幼児育児中の養育者は、自分の子どもとのコミュニケーションをとるために、歌、わらべ唄、育児語などの視聴覚的コミュニケーションを積極的に使用するだろう。」はほぼ支持されたといえるであろう。特に、オリジナルなフレーズに比べ、既存の歌を育児行動に取り入れている割合が最も高いことから、育児行動における既存の歌の重要性が示唆されたと考える。また、歌を育児に取り入れている養育者は育児語の使用が多いことから、1つの視聴覚的コミュニケーションを育児に取り入れることが他の種類の視聴覚コミュニケーションの取り入れにつながる可能性が考えられる。このことは、育児中の養育者と子どものコミュニケーションを円滑にするためにも、まず歌や育児語などの何らかの視聴覚的コミュニケーションを取り入れることが、他のコミュニケーション手段の取り入れにつながっていくことを示唆しており、育児中の視聴覚的コミュニケーションの取り入れの重要性を示していると言えよう。ただし今回の研究はあくまでも複数の視聴覚的コミュニケーション間の関連のみを検討したものであり、どのコミュニケーション手段が最も早く取り入れられるのかや、コミュニケーション手段の取り入れ方の因果関係までは検討できていない。この点に関しては、今後の検討が待たれる部分であろう。

次に、第2の仮説を検証するため、まず、乳幼児を現在もしくは近い過去に育児している養育者が子どもと一緒によくまたは時々歌っているか否かについてと、回答者が子どもの頃自分の母とよく又は時々歌っていたかについてクロス集計した人数を算出した。その結果をFig. 4に示す。

「子どもの頃に母とよく歌った」と回答した人数が6割いたことから、乳幼児を現在もしくは近い過去に育児している養育者の多くが幼いころ母と共に歌った経験がある、もしくはその経験を覚えていたと言えよう。懸念された「乳幼児健忘」のために回答が少ないのではないかという可能性は残る一方

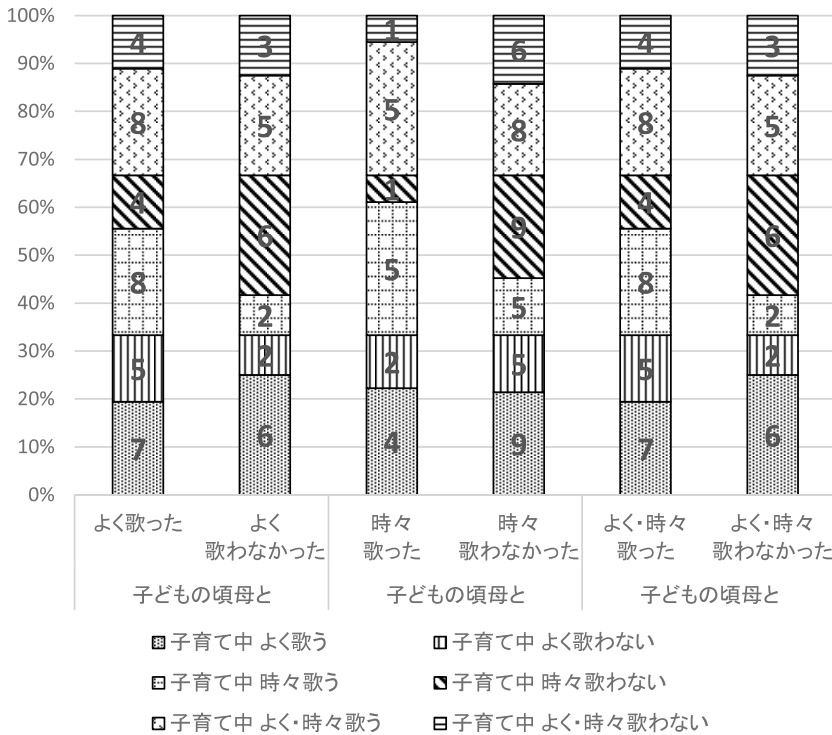


Fig.4 子どもの頃母と歌ったかと乳幼児育児中に子どもと歌うかのクロス集計

で、多くの回答者が、おそらく断片的にはあるであろうが、自身の母親と視聴覚的コミュニケーションを幼少期に経験していたことを記憶していたことを示唆するものである。しかし、「子どもの頃に母と時々歌った」と回答した人数は3割に留まっていたことから、自身の乳幼児育児中の歌の用い方と同様に、子どもの頃においても、歌が生活の中にあった頻度や曲数には個人差があったことが伺われる。そこで、子どもの頃に母と歌った頻度と自身の乳幼児育児中に回答者自身が歌っている頻度との間に関連があるかを検討するために、子どもの頃に母が歌ったか否かとその頻度と、乳幼児育児中に自信が子どもと歌うか否かとその頻度について、現在と過去の組合せ全てについてクロス集計した。そして結果について、それぞれFisherの直接確率法による検定を行った。その結果、「子どもの頃母がよく又は時々歌った」×「乳幼児育児中に子どもと時々歌う」(p = .085)、「子どもの頃母がよく歌った」×「乳幼児育児中に子どもと時々歌う」(p = .085)において人数の偏りが有意傾向であり、「子どもの頃歌った」と回答した者は「乳幼児育児中に子どもと歌う」と回答する者が多い傾向があった。一方で、「子どもの頃母が時々歌った」×「乳幼児育児中に子どもと時々歌う」において人数の偏りも有意傾向(p = .070)であり、「子どもの頃母が時々歌った」と回答しなかった者は「乳幼児育児中に子どもと時々歌う」という回答をしない傾向があった。それ以外の組合せについては、全て有意な人数の偏りは示されなかった。言い換えれば、子どもの頃に母と歌ったか否かやその頻度は、現在の育児行動中に子どもとともに歌う傾向と関連を持つことが示唆された。このことは、子どもの頃に自身の母親と歌った経験が、現在の育児行動の中に歌を子どもとのコミュニケーション手段として取り入れるか否かに影響を与

えていることを示唆していると考えられる。

また、子どもの頃に母が既存の歌ではなく自身のオリジナルな曲やフレーズを使っていたか、また育児語を使用していたかについて、自身の乳幼児の育児行動にそれらを取り入れているか否かを同様にクロス集計して人数を算出した。その結果をFig. 5、Fig.6に示す。

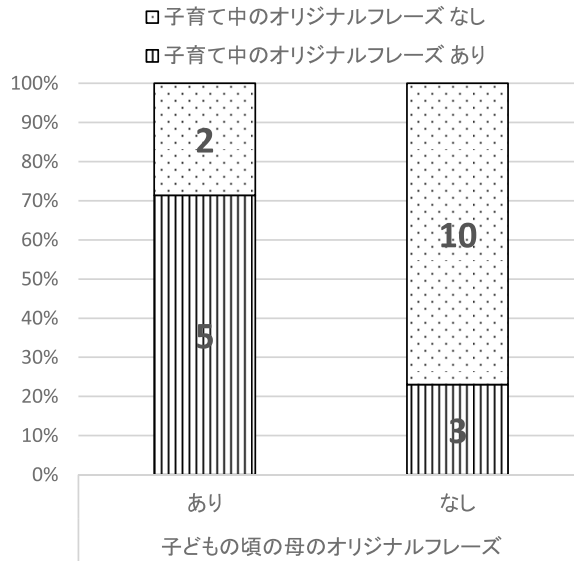


Fig.5 子どもの頃母がオリジナルフレーズを使ったかと乳幼児育児中にオリジナルフレーズを使うかのクロス集計

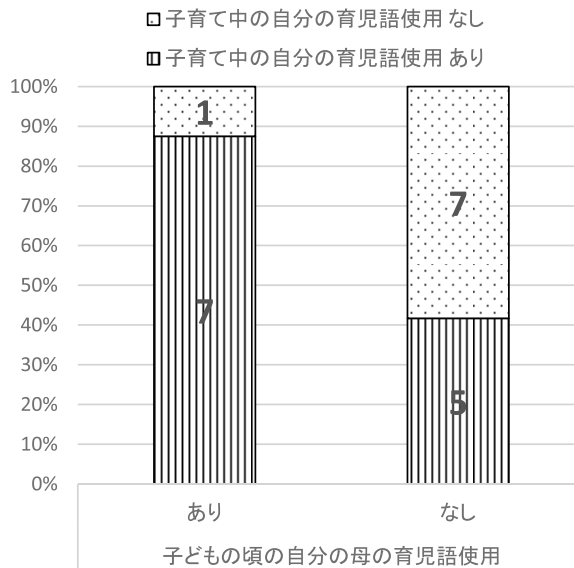


Fig.6 子どもの頃母が育児語を使ったかと乳幼児育児中に育児語を使うかのクロス集計

子どもの頃に母がオリジナルフレーズを使っていた人数も育児語を使っていた人数も共に過半数に達しなかった。一方、「子どもの頃に母がオリジナルフレーズを使ったか否か」×「乳幼児育児中にオリジナルフレーズを使うか否か」、「子どもの頃に母が育児語を使ったか否か」×「乳幼児育児中に育児語を使うか否か」についてクロス集計した結果について、それぞれFisherの直接確率法による検定を行った。その結果、オリジナルフレーズについても ( $p = .052$ )、育児語使用についても ( $p = .054$ ) 人数の偏りは有意傾向であった。子どもの頃に母がオリジナルフレーズを使っていた回答者は、回答者自身の乳幼児の育児行動中にオリジナルフレーズを使う者が期待値より多く、子どもの頃に母がオリジナルフレーズを使っていなかった回答者は、回答者自身の乳幼児の育児行動中にオリジナルフレーズを使わない者が期待値よりも多い傾向が示された。さらに子どもの頃に母が育児語を使っていた回答者は回答者自身の乳幼児の育児行動中に育児語を使用する者が期待値よりも多く、子どもの頃に母が育児語を使っていなかった回答者は回答者自身の乳幼児の育児行動中に育児語を使用しない者が期待値よりも多い傾向が示された。これらオリジナルフレーズと育児語の世代間の関連の検討から、現在育児中の養育者の視聴覚的コミュニケーションの内容は、自身が母親から受けた育児行動と関連していることが示唆された。

以上の結果から、育児行動中の歌、オリジナルフレーズ、育児語の使用について、現在育児中の養育者の行動は、自身が幼いころに母親から受けた育児行動の影響を受けていると言えよう。したがって、仮説2「自分の母親から受けた視聴覚的コミュニケーションによる働きかけの内容や量は、乳幼児育児中の養育者の自分の子どもへの視聴覚的コミュニケーションの内容や量と類似しているだろう。」は支持される可能性が高いと考える。

最後に第3の仮説を検証するために、回答者自身の乳幼児の育児中の視聴覚コミュニケーションの有無と育児不安尺度の6つの下位尺度との関係を検討した。育児不安尺度の6つの下位尺度育児に対する意識の異なる側面を測定していると考えられるため、分析は下位尺度ごとに行った。各分析における評定平均値をTable 2に示す。

第1に、回答者自身の乳幼児の育児中に子どもとよく又は時々一緒に歌うか否かで回答者を2群に分け、歌うか否かを独立変数にし、育児不安下位尺度6つをそれぞれMann-WhitneyのU検定で分析した。その結果、いずれの育児不安下位尺度においても2群間の評定値に有意な差は示されなかった。

Table 2 現在育児中の視聴覚的コミュニケーションと育児不安下位尺度評定平均値

育児不安下位尺度	各育児行動 有無による	育児中子どもとよく・時々歌う		育児中オリジナルフレーズ		育児中 育児語使用	
		平均値 (標準偏差)	人数	平均値 (標準偏差)	人数	平均値 (標準偏差)	人数
育児不安	あり	2.4 ( 0.8 )	13	* [ 2.7 ( 0.7 )	8	2.1 ( 0.6 )	12
	なし	2.1 ( 0.6 )	7	2.0 ( 0.7 )	12	2.6 ( 0.9 )	8
夫のサポート	あり	3.7 ( 1.0 )	13	3.2 ( 1.3 )	8	3.8 ( 0.8 )	12
	なし	3.3 ( 1.3 )	7	3.8 ( 1.0 )	12	3.2 ( 1.5 )	8
育児満足	あり	4.4 ( 0.5 )	13	4.1 ( 1.2 )	8	4.5 ( 0.5 )	12
	なし	4.1 ( 1.3 )	7	4.5 ( 0.4 )	12	4.2 ( 1.2 )	8
子どもの育てやすさ	あり	4.0 ( 1.2 )	13	3.9 ( 1.3 )	8	4.2 ( 1.0 )	12
	なし	4.3 ( 0.8 )	7	4.3 ( 0.9 )	12	3.9 ( 1.1 )	8
自信のなさ	あり	2.4 ( 0.6 )	13	** [ 2.8 ( 0.5 )	8	2.5 ( 0.7 )	12
	なし	2.2 ( 0.8 )	7	2.0 ( 0.6 )	12	2.2 ( 0.6 )	8
相談相手の有無	あり	4.1 ( 0.8 )	13	4.0 ( 0.9 )	8	4.3 ( 0.8 )	12
	なし	4.6 ( 1.0 )	7	4.5 ( 0.8 )	12	4.3 ( 1.0 )	8

注) †・・・ $p < .10$ , \*・・・ $p < .05$ , \*\*・・・ $p < .01$

第2に、回答者自身の乳幼児の育児中に自身のオリジナルな曲やフレーズを使っているか否かで回答者を2群に分け、オリジナルフレーズ有無を独立変数にし、育児不安下位尺度6つをそれぞれMann-WhitneyのU検定で分析した。育児不安 ( $p < .05$ ) と自信のなさ ( $p < .01$ ) で、オリジナルフレーズを使用する群はそうでない群よりも得点が高いことが示された。

第3に、回答者自身の乳幼児の育児中に育児語を使用するか否かで回答者を2群に分け、育児語使用有無を独立変数にし、育児不安下位尺度6つをそれぞれMann-WhitneyのU検定で分析した。その結果、いずれの育児不安下位尺度においても2群間の評定値に有意な差は示されなかった。

ここで、仮説2の検証で、乳幼児を現在もしくは過去に育児している養育者の養育行動が自分の母親から受けた養育行動の影響を受けていることが示唆されたため、回答者の子どもの頃の母親の養育行動を変数に入れた検討を行った。各分析における評定平均値をTable 3に示す。

まず、子どもの頃母とよく又は時々歌ったか否かで回答者を2群に分け、育児不安下位尺度6つをそれぞれMann-WhitneyのU検定で分析した。その結果、子どもの頃に母とよく又は時々歌った群はそうでない群よりも育児満足度の得点が有意に高かった ( $p < .05$ )。その一方で、子どもの育てやすさに関しては、子どもの頃に母とよく又は時々歌った群の方が得点が低い有意傾向が示された ( $p < .10$ )。

次に、子どもの頃母がオリジナルフレーズを使用したか否かで回答者を2群に分け、育児不安下位尺度6つをそれぞれMann-WhitneyのU検定で分析した。その結果、子どもの頃母がオリジナルフレーズを使用したか否かによっては、育児不安下位尺度のいずれにおいても2つの群の間に有意差は示されなかった。

最後に、子どもの頃母が育児語を使用したか否かで回答者を2群に分け、育児不安下位尺度6つをそれぞれMann-WhitneyのU検定で分析した。その結果、子どもの頃母が育児語を使用していた群はそうでない群よりも回答者自身の乳幼児の子育てにおいて自信のなさの得点が低い有意傾向が示された ( $p < .10$ )。

以上の分析から、まず乳幼児を現在もしくは近い過去に育児している養育者がオリジナルフレーズを使用している場合の方が、より強く育児不安や自信のなさを強く感じていることが示された。しかし、子どもの頃母とよく・又は歌った経験がある回答者の方が育児満足度はより高い一方で、子どもの育てやすさについては低く感じやすい傾向が示唆された。これらの結果から、仮説3「育児中の視覚的コ

Table 3 自分の母親から受けた視聴覚的コミュニケーションと育児不安下位尺度評定平均値

育児不安下位尺度	各育児行動有無による	子どもの頃よく・時々歌った		子どもの頃オリジナルフレーズ		子どもの頃育児語使用	
		平均値(標準偏差)	人数	平均値(標準偏差)	人数	平均値(標準偏差)	人数
育児不安	あり	2.3 ( 0.8 )	12	2.4 ( 1.0 )	7	2.4 ( 0.4 )	8
	なし	2.4 ( 0.7 )	8	2.3 ( 0.7 )	13	2.3 ( 0.9 )	12
夫のサポート	あり	3.8 ( 1.0 )	12	3.6 ( 1.2 )	7	3.5 ( 0.5 )	8
	なし	3.2 ( 1.3 )	8	3.5 ( 1.1 )	13	3.5 ( 1.4 )	12
育児満足	あり	4.6 ( 0.4 )	12	4.5 ( 0.5 )	7	4.4 ( 0.5 )	8
	なし	* 3.9 ( 1.1 )	8	4.2 ( 0.9 )	13	4.3 ( 1.0 )	12
子どもの育てやすさ	あり	3.7 ( 1.1 )	12	3.8 ( 1.4 )	7	3.6 ( 1.0 )	8
	なし	† 4.7 ( 0.5 )	8	4.3 ( 0.8 )	13	4.4 ( 0.9 )	12
自信のなさ	あり	2.3 ( 0.7 )	12	2.5 ( 0.5 )	7	† 2.7 ( 0.6 )	8
	なし	2.4 ( 0.7 )	8	2.2 ( 0.8 )	13	† 2.1 ( 0.7 )	12
相談相手の有無	あり	4.3 ( 0.8 )	12	4.3 ( 0.6 )	7	4.3 ( 0.9 )	8
	なし	4.2 ( 1.0 )	8	4.3 ( 1.0 )	13	4.3 ( 0.9 )	12

注) †... $p < .10$ , \*... $p < .05$ , \*\*\*... $p < .01$

コミュニケーションの内容・量が充実している母親は育児満足度が高く、育児不安は低いであろう。」は支持されなかった。

仮説3が支持されなかった理由としては複数の可能性が考えられる。まず、乳幼児を現在もしくは近い過去に育児している養育者が用いる視聴覚的コミュニケーションのうち、歌や育児語については使用する者が多く、使用の有無による人数の偏りが生じてしまった。そのために、歌や育児語を育児中に使用しない分析対象者を増やすことで、異なる結果が得られる可能性が考えられよう。2つ目の可能性として、オリジナルフレーズを使う乳幼児育児中の養育者は、育児不安や子育ての自信のなさが強いからこそ、それを解消する手立てとしてコミュニケーションを必死に模索しているとも考えられる。育児不安が強く、自信がないからこそ、我が子とより円滑なコミュニケーションを取ろうと工夫した結果が、オリジナルフレーズの使用につながっているとも解釈できよう。さらに、子どもの頃に母とよく又は時々歌った経験があった回答者は、我が子の子どもの育てやすさにおいては低く感じているものの、育児満足度そのものは高いという興味深い結果が得られたことも、仮説3が支持されなかった理由の一つと解釈できよう。すなわち、子どもの頃に母親から充実した視聴覚的コミュニケーションを受け取っていた者は、育児に対して肯定的態度を持っており、自身の乳幼児育児に対しても満足度を高める要因につながっていると考えられる。しかし一方で、回答者自身の子どもの頃の記憶から、自分自身の乳幼児育児に対して反省的、批判的に見る視点をもっている可能性があり、それが子どもの育てやすさを低く感じる要因となっているのではなかろうか。言い換えれば、子どもの頃、母親から充実した視聴覚的コミュニケーションを受け取って育った者は、育児自体にはポジティブな態度を形成できるが、自分自身の育児に対しては、モデルとなる自分の母親との子どもの頃の思い出があるがゆえに、「これでいいのか」「もっと何かできないか」と考える方向に向かうのではないかと考えられる。そのように仮定すれば、オリジナルフレーズを育児に取り入れている乳幼児を現在もしくは過去に育児している回答者が育児不安を感じ、育児に自信がもちにくいことも同様の説明が成り立つであろう。オリジナルフレーズを使う回答者は、子どもとのコミュニケーションに高い理想を持っているからこそ、「これでいいのか」「もっと何かできないか」と考え、それが様々な視聴覚的コミュニケーションを取り入れる動機づけとして働いている可能性が考えられる。

ただ、留意したい点としては、本研究の回答者が、全体としては自身の育児の状況にだいたいにおいては満足を感じている可能性が高かったことである。様々な角度から群分けした結果、2群の間に有意差が示された育児不安や自信のなさ、に関しては5段階評定の中央値である3と比較して著しく低いとは言えない程度のものであり、どちらかという漠然とした「これでいいのだろうか。」という程度のものであろう。子どもの育てやすさに至っては低い方の群でも平均評定値が3.7であり、本研究の結果がすぐに支援が必要な養育者の存在を示すものであるとはいえないであろう。同様に育児満足についても低い方の群でも3.9と高い値を示しており、本研究の回答者の多くが、現状の育児にほぼ満足を感じていることが伺われる結果であった。

#### 4 総合的考察

本研究は、乳幼児を現在もしくは近い過去に育児している養育者がとる視聴覚的コミュニケーションについて、3つの目的に焦点を当てて検討を行った。まず、乳幼児育児中の養育者が育児行動の中で自分の子どもにどのように働きかけているのかについて、実態を明らかとすることを第一の目的とした。

その結果、既存の歌を育児に取り入れている回答者が多く、それ以外にも、育児語やオリジナルなフレーズなど、様々な視聴覚的コミュニケーションの手段を取り入れている養育者が多いことが示された。

視聴覚的コミュニケーションは子どもの誕生のその瞬間から養育者との間で成立し、かつ、新生児期から子どもの方から主体的に養育者への働きかけを開始できるコミュニケーション手段である。身体的コミュニケーションも重要であると考えられるが、身体的コミュニケーションを行いつつ、声掛けや歌などの視聴覚的コミュニケーションが付随していることも多いであろう。本研究の結果からも、既存の歌を育児に取り入れている養育者が多かった。このように視聴覚的コミュニケーションを育児にとり入れている養育者が多いということは、それだけ、養育者が経験的にもしくは知識として視聴覚的コミュニケーションの有用性を理解しているからだと考えられる。一方で、育児に視聴覚的コミュニケーションを取り入れないと回答した養育者も存在した。今後は、幼い子どもを育児中の養育者に歌、わらべ唄、育児語などの視聴覚的コミュニケーションの有用性を理解してもらい、簡単な声掛けや歌などから育児に取り入れていくような啓蒙的活動が重要な課題となると考える。

本研究の第2の目的は、乳幼児育児中の養育者自身が、自分の母親からどのような働きかけを受けて育ってきたかを記憶しているかどうか、乳幼児育児中の養育者の育児行動や育児意識に影響を与えているか否かを明らかにすることであった。分析の結果、回答者の母親から受けた視聴覚的コミュニケーションによる働きかけの内容や量は、乳幼児を現在もしくは近い過去に育児している養育者の自分の子どもへの視聴覚的コミュニケーションの内容や量と類似していることが示された。このことは、人間の育児行動は、本能的側面だけでなく、学習され伝承されていく本質を持っていることを示していると考えられる。充実したコミュニケーションを経験して育った者は、養育者になった時に自らが受けたコミュニケーションを再現し、それがさらに次世代へとつながっていく。「子どもとのかかわり方が分からない」という養育者の悩みをよく耳にするが、そういった事柄が育児不安やさらには児童虐待につながっている要因になっているのであるとすれば、育児中の子どもとのコミュニケーションの取り方を学習・伝承していくことの重要性が示されたと言えよう。

本研究の第3の目的は、乳幼児育児中の視聴覚的なコミュニケーションの内容や量と、育児に対する意識とは関連するか否かを検討することであった。仮説に反して、視聴覚的コミュニケーションを多く使用する養育者は、相対的に育児不安が強く、子育てに自信がないことが示された。この結果は、育児不安の高い母親は子に無関与な態度は少なく、遊びへの積極的参加が多かったことを示した興石(2002)の結果とも一致する知見であろう。しかし、一方で、本研究の結果から、乳幼児を現在もしくは近い過去に育児している養育者が自分の母親から受けた視聴覚的コミュニケーション、特に歌について、経験したと回答した養育者は現在の育児満足度そのものは高いことが示された。したがって、本研究の対象者で視聴覚的コミュニケーションを多用する養育者が相対的に育児不安が強く、子育てに自信がない理由として、視聴覚的コミュニケーションそのものが育児不安を招いていると考えるのは妥当ではないだろう。そうではなく、「もっと子どもとコミュニケーションをとりたい」「これでいいのか」「他に出来ることはないのか」という意識が高い養育者が、本研究で使用した育児不安尺度では育児不安が高く子育てに自信がないという形で現れたものと考えることができよう。育児に対して理想が高く、我が子とより円滑なコミュニケーションをとる必要性を十分に認識しているからこそ、オリジナルフレーズの使用という視聴覚的コミュニケーションのバリエーションを増やす行動につながったものと考えられる。今後の課題としては、育児に対する理想が高く、我が子とより円滑なコミュニケーショ

ンを求めている母親に対して、具体的にコミュニケーションの方法を例示するなどの活動を積極的に行い、養育者の行動が育児不安の軽減につながるよう育児支援の体制を整えることが重要であろう。

また、育児不安については、本研究で用いた質問紙の質問表現が「子育て中の気持ちに当てはまるもの」を問うものであったことが結果に影響をもたらしていた可能性が否定できない。すでに子どもが乳幼児期を過ぎ、回顧的な回答を行った養育者の中には、育児不安に関して、子どもが乳幼児の頃のことではなく、子どもが成長した現時点での気持ちを回答した者が含まれていたかもしれない。今後、質問表現を変えるなどの方法の改良を行ったうえで、さらに検討をする必要があると考える。

最後に、今後の課題として子育て中に子どもに向けられて発せられる言葉の概念の再検討が必要であると考え。従来、大人に対しては別の言葉があるのに、子どもに向けて違う表現をしている言葉(例：犬→ワンワン)として「育児語」という用語で概念化されてきた。しかし、養育者が子どもに向けて働きかけを行う際、従来、「育児語」と表現されてきた子育て中に用いられる言葉だけでなく、乳幼児に向けた言語的・非言語的な側面も含めて検討することが必要なのではないかと考える。子育て中に発せられる子どもに向けた言葉の中で、大人に向けて発するものとは異なる音韻、形式を持っている言葉という育児語の特徴に加えて、養育者の子どもに向けた視線などを含めたしぐさや態度も含めて、例えば「子育て言葉」というようなより包括的な概念を定義し、検討することが必要であろう。

加えて、今回は視聴覚的コミュニケーションとして、歌、オリジナルなフレーズ、育児語に焦点を当てた。育児中の回答者の多くは歌としては既存の歌でもいわゆる流行歌や子ども用に作曲され音源が販売されているような曲を挙げた者が大半であった。しかし、インフォーマルなインタビューを行うと、いわゆる「わらべ唄」を育児にとりいれている養育者も多数いることが伺われた。「わらべ唄」は特別な音楽の知識などがなくても、日々の生活の中で伝承されていくものであり、また幼い子どもでも聞き取りやすい音韻やリズム、動きなどが取り入れられている。そのため、「わらべ唄」を視聴覚的コミュニケーションの一つとして積極的に取り入れていくことが、養育者と子どもとのコミュニケーションの円滑化につながり、育児不安の軽減にもつながる可能性は十分に考えられよう。今後、視聴覚的コミュニケーションの中でも、「わらべ唄」に焦点を当てた検討を行うことも重要な課題であると考え。

## 付記

研究にご協力頂きました回答者の方々へ心から感謝いたします。また本研究の一部は十文字学園女子大学平成29年度プロジェクト研究費の助成を受けて行われました。

## 引用文献

- 阿部ヤエ 2002 「わらべうた」で子育て 入門編 福音館書店母の友。
- 會田理沙・大河原美以 2014 児童虐待の背景にある被害的認知と世代間連鎖：実母からの負情動・身体感覚否定経験が子育てで困難に及ぼす影響 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系 65(1) 87-96.
- 神庭純子・藤生君江・飯田澄美 2005 養育期の家族における育児不安とその要因に関する研究(第1報) 家族機能との関連性について 家族看護学研究 10(3) 68-77.
- 興石 薫 2002 母子相互交渉の質と母親の育児不安及び子どもの言語発達との関連性について 小児保健研究 61(4) 584-592.
- 厚生労働省 2016 平成27年度福祉行政報告例の概況。



<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/gyousei/15/dl/gaikyo.pdf>

- 久保田まり 2010 児童虐待における世代間連鎖の問題と援助的介入の方略：発達臨床心理学的視点から  
季刊・社会保障研究 387-384.
- 村上京子・飯野英親・塚原正人・辻野久美子 2005 乳幼児を持つ母親の育児ストレスに関する要因の分析  
小児保健研究 64(3) 425-431.
- 中川 愛・松村京子 2006 乳児との接触未経験学生のあやし行動：音声・行動分析学的研究 発達心理学  
研究 17(2) 138-147.
- 都筑千景・金川克子 2002 産後1か月前後の母親に対する看護職による家庭訪問の効果 母親の不安と育  
児に対する捉え方に焦点を当てて 日本公衆衛生雑誌 49(11) 1142-1151.
- 吉田弘道 2012 育児不安研究の現状と課題 専修人間科学論集心理学篇 2(1) 1-8.
- 吉田弘道・山中龍宏・巷野悟郎・太田百合子・山口規容子・牛島廣治 2014 育児不安尺度の作成に関する  
研究—因子間相関について— 専修人間科学論集心理学篇 4(1) 39-44.

